

## ブラジル北東部の避暑地グラバタ

斎藤 功・S. コーティニョ\*  
丸山 浩明\*\*・須山 聡

- |                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| I はじめに               | III-2 別荘団地      |
| II グラバタの自然・社会環境      | III-3 ホテルと観光客   |
| II-1 ボルボレマ高地とグラバタの環境 | IV 種馬牧場と温帯野菜生産  |
| II-2 グラバタの都市形成と拡大    | IV-1 種馬牧場と競走馬牧場 |
| III 避暑地としてのグラバタ      | IV-2 温帯野菜・花卉栽培  |
| III-1 個人別荘           | V むすび           |

キーワード：高原保養地，週末保養地，別荘団地，競走馬牧場，プレジォス

### I はじめに

熱帯の集落，とくに避暑集落（Hill Station）に関する研究は，インドや東南アジアに集中し，アフリカやラテンアメリカに関する研究は少ない（斎藤，1990a）．ラテンアメリカでは標高の上昇とともに土地利用や生活様式が変化する様子を，Waibel（1928）はシエラマドレドチアパスの事例で，Troll（1968）はアンデス山地に関するの地生態学的研究で明らかにした（斎藤，1997）．また，Price（1934）は白人集落が低地をさけて山地に形成されている様相を報告している．しかし，ブラジルの避暑集落に関する研究は極度に少ない．

Deffontaines（1937）のブラジル山地の集落に関する研究は例外的である．彼は1870年に皇帝ペドロ二世によって建設され，リオデジャネイロの避暑地として知られるペトロポリス・テレンポリス（Ferrez，1970）の両市が，リオデジャネイロに牛乳や野菜を供給するドイツ系移民の農業集落として始まったと指摘する．ところが1890年の黄熱病の蔓延で，この2つの都市は公式の退避所に指定され，政府や外国の高官がそこに移転したため，ペトロポリスは首都の様相を呈した．両市のほかにもいくつかの避暑地が開かれ，野菜栽培地域はより遠くへと押しやられたという．デフォンテインは，夏の避暑客が増加し続け，大都市の周辺山地に避暑地が形成されたと指摘しているが，ブラジル北東部の避暑地については触れていない．

ブラジル北東部の第3の大都市レシフェ（Recife）の西部にはボルボレマ高地（Planalto da Bor-

\* ブラジル，ジョアキンナブコ財団社会科学研究所 INPSO, Joaquim Nobuco Foundation, Brazil

\*\* 金沢大学教育学部 Kanazawa University

borema) があり、ガラニユンス (Garanhuns) やグラバタ (Gravatá) は避暑地として知られている。しかし、その避暑地としての様相についての報告はブラジル北東部の優れた入門書である Andrade (1968) や Webb (1974) の著書でもほとんど触れられていない。ただ、海岸部ゾナダマタと内陸部セルトンの漸移地帯であるアグレステにあるグラバタは、地形性降雨のあるブレジョとして雨が少ない (Almeida, 1958; Melo, 1980)、野菜栽培も発達しているという (Lins, 1989)。

本稿の目的は、ブラジル北東部の避暑地グラバタを取り上げ、アグレステの避暑地や種馬牧場、温帯野菜産地としての性格を明らかにすることにある。

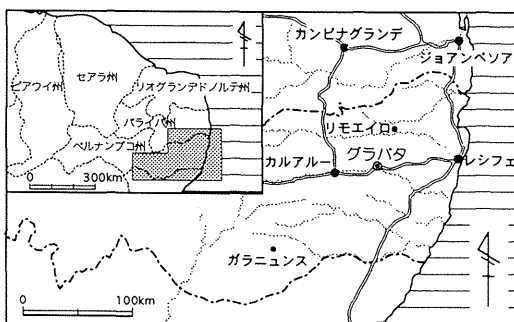
## II グラバタの自然・社会環境

### II-1 ボルボレマ高地とグラバタの環境

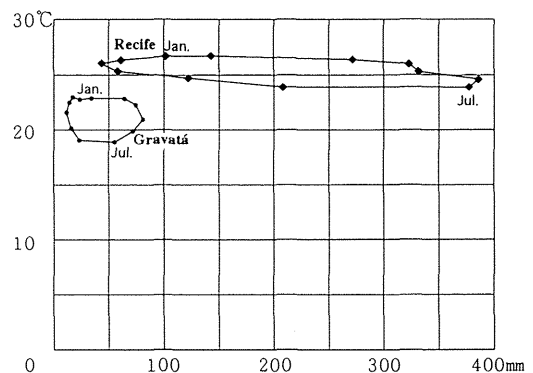
ノルデステの中心都市レシフェは、海岸部のサトウキビ地帯で生産された砂糖の輸出港として発展した。海岸部の西方にはボルボレマ高地が広がる。ボルボレマ高地は一般には400~800mの山地<sup>1)</sup>であるが、ペルナンブコ州東部ではイポジュカ川に平行して東西にカピバリーベ川が流れているため、河間地の標高は450~600mとなっている。

グラバタはレシフェから西に80km、ボルボレマ高地上に位置し、乗用車で約1.5~2.0時間の距離にある (第1図)。このアクセシビリティのよさが、レシフェと比較して相対的に冷涼な気候とあいまって、ノルデステの避暑地として知られるガラニユンス<sup>2)</sup>と異なり週末避暑地にさせているのである。

ここでレシフェとグラバタの気候についてみよう。第2図にグラバタとレシフェの月別平均気温と平均降水量を示した。一見して、グラバタの気温が1年を通じてレシフェより低く、降水量の月変動の幅が小さいことがわかる。グラバタの平均気温は、12月の23.0℃を最高に、7月の18.9℃まで、年較差がわずか4.1℃しかない。レシフェにおける気温の年較差はそれより小さく3.4℃だが、グラバタ



第1図 研究対象地域



第2図 グラバタおよびレシフェにおける月別平均気温と降水量

(Secretaria de Planejamento, Governo de Pernambuco (1982) および『理科年表』1995年版より作成)。

の気温がレシフェのそれを上回ることはなく、いずれの月においても3.6～5.0℃低い。年平均気温をみると、グラバタは21.4℃、レシフェは25.6℃で、4.2℃の差がある。両地域の降水量はさらに対照的で、グラバタの月降水量が11.6mm（10月）～80.2mm（5月）と少なく、年較差も小さいのに比べて、レシフェでは44.5mm（11月）～385.8mm（6月）と変動幅が大きく、雨季の降水量は著しく多い。したがって、標高447m（中心地）～700m（最高点）に位置するグラバタは、熱帯にありながら相対的に涼しく乾燥した高原の恒春都市の様相を呈する。とくにレシフェなど海岸地域の高湿多湿な都市から訪れる人々には快適な自然環境を提供している。

標高が500m前後のグラバタは、理論的にはレシフェとは2.5℃しか違わないはずなのに、実際には4℃前後の開きがある。しかし、体感温度としてはもっと差があるように思われる。すなわち、グットリアデサントアントン（Vitoria de Santo Antão）からボルボレマ高地への坂を登り、パイナップル栽培地帯を経てロシア山地にかかり、グラバタ郡に入ると涼しい高原の気分になる。これはレシフェーカルアルー（Caruaru）を結ぶ国道232号線が標高500m前後のゆるやかな尾根筋を走っているせいかもしれない。とくに8月の気候は冷涼で、レシフェで半袖でもグラバタに達すると長袖やセーターが欲しくなる。これは雨季である8月にボルボレマ高地にクラウドラインがかかることも気温をより低下させる一因であろう。

グラバタ郡の植生は、セルトンを代表するジュレマやマメレイロが増えるものの、景観的にはゾナダマタとセルトンの漸移地帯であるアグレステの様相を示し、パークランド牧場（Saito and Yagasaki, 1987）が広がる。グラバタ市街地はイボジュカ川を挟んで標高450～500mに展開する。国道232号線は市街地の北を走っているが、国道の北は郡の北半が含まれるカピバリーベ水系の谷になっている。市街地の南部では比較的深くイボジュカ川の水系が入っており、水系の上流部は地形性降雨のあるブレジョ地帯<sup>3)</sup>と重なり、マンダカルー（Mandacaru）の町などの豊かな農業地帯となっている。そこを越えてさらに南部へ行くと、ウルスミリン（Uruçu-Mirin）を中心とするイボジュカ川支流のサトウキビ地帯となり、サトウキビの蒸留酒（Pinga）を醸造する製糖所（Engenho）も存在する。

## II-2 グラバタの都市形成と拡大

### 1) 宿場町としてのグラバタ

ノルデステで最も繁栄したペルナンブコのカピタニアでさえ、17世紀初頭には海岸から10レグア（約60km）までしか開発が進まなかった（Andrade, 1979）。したがって内陸部の開発は、製糖業と牧畜業の地域分業が成立した17世紀以降のことであった。牧畜業の内陸部進出は、まず恒常河川のサンフランシスコ川に沿って行われた。サンフランシスコ川が牧場の川（Rios dos currais）と呼ばれてきたのは、それが提供する水や岩塩、良質の天然牧草地に誘引され、多数の牧場が川沿いに立地したからである。

陸路による内陸部進出に際して、長い間ボルボレマ高地の急崖が物理的障害であったが、植民者の冒険心や土地獲得の夢が陸路でアグレステを経てセルトンに到達するさまざまなルートを探索させ

た。グラバタを通過するイポジュカルート (Roteiro do Ipojuca)<sup>4)</sup> もサンフランシスコ川に到達する一つであった (FIAM, 1982)。その入植ルートは、セルトンで肥育した牛をオリンダやレシフェなどの都市へ輸送するキャトル・トレイル (牛道, Estrada de boiada) にもなった。

牛道に沿ってほぼ1日行程の間隔で牛の群れ (Boiada) や牛を追うカウボーイ (Boiadeiro) たちが休息できる家畜囲い (Curral) が形成された。グラバタはまさにイポジュカルートの宿場町として植民・開発された所で、その地名は当時ここが“クラウアタの停泊地 (Parada de Crauata)”と呼ばれていたことに由来している。良質な天然牧草と豊富な水、穏やかな気候に恵まれたグラバタは、牛道いや旅人の休息地、あるいは薪やウシなどの小規模な商業地としての機能を果たすようになった。1797年には、封建領主のミランダ (Jose Justino Carreiro de Miranda) が、イポジュカ河畔に広大な牧牛ファゼンダを設置した。また1808年にはファゼンダ・グラバタが設置された (FIAM, 1982)。

18世紀に村落 (Povoado) にまで成長したグラバタは、1857年に小教区 (Freguesia) に、1881年には町 (Vila) へと昇格した。さらに、3年後の1884年6月13日には、法令1,805号によりグラバタは町から市 (Cidade)、ならびに司法区 (Comarca) へと昇格した。ブラジルが帝政から連邦共和制に移行した1889年から4年後の1893年には、グラバタは自治権を持つ郡 (Município) へと昇格した。グラバタ郡は行政的には中心地のグラバタ、ウルスミリン、シャグランジ (Chá Grande)、ルシーニャ (Russinha) の4地区からなっていた。

このようなグラバタの著しい発展に大きく貢献したのが鉄道の敷設であった。ペルナンブコ州の鉄道網は、19世紀後半に州都のレシフェを起点に、沿岸部を北方にパライバやリオグランデノルテ州へと向かう路線、沿岸部を南方にアラゴアスやセルジペ州へと向かう路線、および西方の内陸部セルトンへと向かう路線と、おもに3方向へと延びている。グラバタには大西部ブラジル鉄道会社 (The Great Western of Brazil Railway Co., Ltd.) が建設したペルナンブコ中央鉄道 (Estrada de Ferro Central de Perunambuco) の鉄道駅が設置された。鉄道駅の開設は、人やさまざまな物資輸送を活性化し、グラバタの経済発展を促進したのである。ペルナンブコ中央鉄道の営業距離は、1919年には269.268キロであったが、現在はペルナンブコ州西部のサルゲイロ (Salgueiro) まで延びている。

一方、レシフェとグラバタを結ぶ道路は、アメリカのグレートプレーンズ同様、基本的にはかつてのキャトル・トレイルを改修したものである。自動車の登場により1910年代にはヴィトリアデサントアントンまで道路が改良されたが、その西にそびえるボルボレマ高地の急崖ルシーニャの壁 (Subida da Russinha) が難所となっていた。そのため、レシフェからの道路はこの急崖を避け、ルシーニャ地区を経由してグラバタに通じていた。ルシーニャの壁を通過する現在の幹線道路 (国道232号線) が開削・舗装されたのは、1950年代の終わりになってからであった。その結果、公共バスの利用<sup>5)</sup> などによりレシフェへの近接性が高まり、道路交通は鉄道にかわりその重要性を著しく高めていった。

## 2) グラバタの都市的発展

グラバタの都市発展の様相は、その人口変動にも端的に反映されている (第1表)。1872年のグラバタの人口は8,201人であったが、綿作や牧畜の発展に支えられ、1890年には22,976人となった。その

第1表 グラバタ郡における人口の推移（1872～1991年）

地域\年次	1872	1890	1910	1920	1940	1950	1960	1970	1980	1991
ブラジル全体	9,930,478	14,333,915	—	30,635,605	41,944,397	51,944,397	70,070,457	93,139,037	119,002,706	146,825,475
ペルナンブコ州	841,539	1,030,224	—	2,154,835	2,688,240	3,395,185	4,095,379	5,160,640	6,141,993	7,127,855
レシフェ郡	116,671	111,556	—	238,843	348,424	524,682	788,336	1,060,701	1,203,899	1,298,229
グラバタ郡 合計	8,201	22,976	11,000	33,364	42,536	47,859	52,894	49,366	52,501	61,494
グラバタ地区	—	—	—	16,359	18,839	19,308	25,271	32,680	39,821	51,297
シャグランジ地区	—	—	—	12,093	10,918	16,317	11,839	—	—	—
マンガカルー地区	—	—	—	—	—	—	5,438	6,105	4,726	3,799
ウルスミリン地区	—	—	—	4,912	12,799	12,234	10,346	10,581	7,954	6,398
都市人口比*	—	—	—	—	0.31	0.35	0.53	0.83	1.93	3.01

\*都市人口比は、グラバタ郡の農村人口を1とした場合の都市人口の比率を意味する。

(ブラジル人口センサスおよびFIAM資料により作成)。

後、1910年には人口が一時的に11,000人にまで減少しているが、これはグラバタ郡の行政区画の変更起因するもので、実質的な人口の減少はなかったと考えられる。1920年にはグラバタは33,364人からなる郡であった。地区別に人口をみると、グラバタが16,359人、シャグランジが12,093人でともに1万人を越える都市であったのに対し、ウルスミリンは4,912人の町であった。グラバタ郡の人口は1940年の42,536人から1950年の47,859人、1960年の52,894人へとなり、人口増加率は1940～1950年が12.5%、1950～1960年が10.5%であった。これは同期におけるブラジル全体の人口増加率がそれぞれ26.0%、34.9%、ペルナンブコ州が26.3%、20.6%と比べても低いものであった。

グラバタ郡の人口は、1960年の52,894人から1970年の49,366人へと減少しているが、これはこの間にシャグランジがグラバタ郡から分離独立したためで、人口は実質的に増加し続けていたと考えられる。1980年には人口が52,501人と1960年当時とほぼ同規模にまで増大し、さらに1991年には61,494人に達した。とくに、グラバタの観光地化が著しく進展した1980～1991年期には、人口が8,993人、率にして17.1%の人口増加を記録した。これは、同期のブラジル全体の23.4%より若干低いものの、ペルナンブコ州の16.1%、レシフェ郡の7.8%を上回る人口増加率であった。

ところが、郡全体としては大きく増加した人口も、地区別に考察するとマンガカルーとウルスミリンで1970年以降著しい人口減少が認められる。すなわち、前者では1970年の6,105人から1991年の3,799人へと約20年間に37.8%減少し、後者では同時期に10,581人から6,398人へと39.5%もの減少がみられた。このことは、1970年以降のグラバタ郡の大きな人口増加は、同郡の中心地であるグラバタ地区の顕著な都市化に起因するものであることを示唆している。事実、グラバタ地区の人口は1970年の32,680人から1980年の39,821人、そして1991年の51,297人へと大きく増加している。人口増加率は、1970～1980年が21.9%、1980～1991年が28.8%であり、1970～1991年期では57.0%という大きな成長を示している。

そこで、農村人口を1とした場合の都市人口比を算出すると、1940年には0.31、1950年には0.35で、この時期には都市人口が農村人口の約3分の1に過ぎなかった。しかし、その後は都市人口が大きく増加し、都市人口比も1960年には0.53、1970年には0.83にまで増大した。1980年には都市人口が34,609人、農村人口が17,892人となり、都市人口は農村人口の約2倍に大きく増加している。さら

に、1991年には都市人口が46,147人、農村人口が15,347人となり、都市人口は農村人口の実に3倍にも達している（第1表）。このことは、グラバタ郡では1970～1980年にかけて中心地のグラバタ地区で都市化が進んで都市人口が急増し、その傾向はさらに1980～1991年にかけて加速化されたことを示唆している<sup>6)</sup>。

### Ⅲ 避暑地としてのグラバタ

前述のように熱帯において冷涼で高燥な環境に恵まれたグラバタには避暑客を中心に多くの観光客が流入する。とりわけ、金曜日の夜から日曜日にかけての週末には沿岸部の大都市から多い時には約2万人もの都市住民がグラバタを訪れるといわれている。こうした人々の動きは1960年代の後半から見られたが、それが顕著になるのはモータリゼーションが進展する1980年以降のことである。避暑客の多くは、週末レジャーの理想的な新天地をグラバタに見出した州都レシフェの都市住民（Recifenses）である。

グラバタには、休養のため週末や一時期を過ごす各種の宿泊施設がある。それらは個人別荘（Chácara）、別荘団地（Privê）、およびホテルに付属するシャレー（Chalê）やフラット（Flat）に大きく3区分できる。そこで、次にこれらの区分に従って、週末避暑地としてのグラバタの特徴を解明しよう。

#### Ⅲ-1 個人別荘

グラバタの個人別荘は、原初的には気候の優れた場所で病気の回復をはかる転地療養なども含まれて始まったとされるが、それに関する文献は見あたらず、現地でも確認できなかった。グラバタの土地台帳にはファゼンダ等の名前、所在地、所有者名と居住地、総面積、確認面積等が記載されている。その土地台帳には、Chácara Bella Vistaのように別荘の名を冠した農場が7ヶ所認められる。このうち4農場はグラバタ在住者の所有地で、面積は1.0, 1.3, 2.0, 3.6haである。また、残りの3農場はレシフェ（パウルスタを含む）在住者の所有で、面積は1.6, 2.5, 10.0haである。しかし、3haを超える土地所有者の確認面積は、いずれも2.0haであることから、個人別荘の面積は1.0～2.0haの範囲内にあり、それ以外の土地は農地として登録されていると考えられる。この1.0～2.0haの面積は、現地観察からも確認され、宣教師等によって開かれた初期の軽井沢の別荘地の面積に相当するものである。

別荘地は邸宅とプールがセットになっており、ブーゲンビリアやハイビスカス、キョウチクトウなどの花に加え、マンゴ、パパイヤ、ピーニャなどの果樹が植えられているのが一般的である。さらに、敷地を有刺鉄線で囲んだ別荘も多いが、一般には門番を雇い犬を放している。したがって、個人別荘は景観的には花や果物の多い瀟洒な邸宅といえる。

個人別荘の分布は分散的で特定するのは難しいが、どちらかといえば国道232号線の北側に多いように思われる。とくに、旧道西の尾根筋の小さな高まりにある瀟洒な大邸宅（写真1）は、インドの最初の避暑地シムラの衛星の高原都市の1つであった野生花園（wild flower garden）（Mitchel, 1972）

やマレーシアのペナン山地のストロベリーヒル (strawberry hill) (Aiken, 1987) を想起させるものであった。

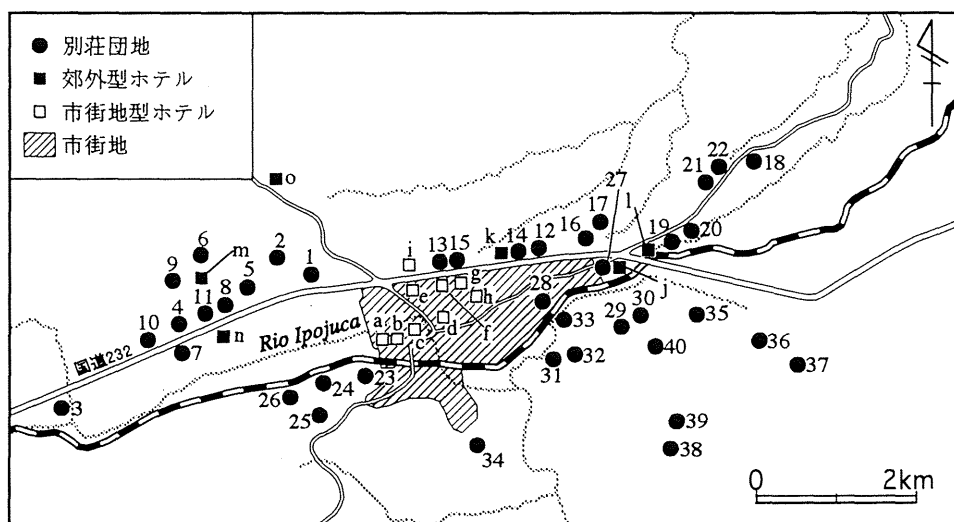
個人別荘と同じ役割を果たしているものに、広大なファゼンダ牧場の丘の上に立地する大邸宅 (Casa grande) がある。牧場主 (Fazendeiro) は週末にファゼンダを訪れるものの、本来の機能が放牧してある牛の管理であるため、別荘とは同一視できないだろう。

### Ⅲ-2 別荘団地

#### 1) プリベの展開

避暑地グラバタを強く特徴づけるのは、通称プリベ (Privé Condomínio Fechado Privado) と呼ばれる別荘団地である。プリベとは周囲を壁や柵などで取り囲まれた敷地内に、数戸から数10戸の別荘家屋と共同利用のプールやテニスコート、娯楽施設、集会場などが設置されたいわゆる別荘団地のことである<sup>7)</sup>。プリベは1960年代の後半に最初に建築されて以来、増加を続けており、その数は1997年現在で約60地区、別荘家屋数にして1,200戸を上回るであろうと見積られている。

第2表は、グラバタ市街の周辺に立地するプリベのリストである。また第3図はプリベの分布を示している。第3図から、別荘団地はグラバタ市街地を取り囲むように分布していることがわかる。別荘団地の分布から、当該地域はグラバタ市街地の北側を東西に横切る国道232号線によって南北に大別され、さらに北側の地域は、北西部・北中部・北東部に、南側の地域は南東部・南部・南西部に3分される。グラバタ市街の北で国道232号線に面して建設されたスイサ (Suiça), アルピナ (Alpina), ヴェネーザ (Veneza) が最初のプリベである。これらの別荘団地は戸数が50~60で、幹線道路の国道232号線にいずれも近接しているため、アクセシビリティがよい。次いで造成されたのが、南部の



第3図 グラバタにおける別荘団地およびホテルの分布 (1997年)  
番号は第2表, アルファベットは第3表に対応する。  
(グラバタ郡役所の資料および現地調査により作成)。

第2表 グラバタにおける別荘団地（1997年）

地区	番号	名称	戸数	特徴
北西部	1	Privê Casa Blanca	12	分譲地・発展
	2	Privê Casa Grande	35	
	3	Privê Chateau Paraiso	—	
	4	Privê Caraguata	8	
	5	Privê Village Casa Grande	30	
	6	Privê Santana	30	
	7	Privê Aldeia da Serra	35	
	8	Privê Luzern	12	
	9	Privê Flor de Santana	8	
	10	Privê Cortegada	40	
	11	Privê Quintas Voltadorio	—	
		Privê Residence Casa Grandel	18	
		Privê Recanto da Serra	6	
		Privê Mapuquara	6	
	Privê Repouso da Serra	6		
	Privê Serra Nobre	5		
北中部	12	Chácara Suíça	50	初期停滞
	13	Conjunto Veneza	64	
	14	Chácara Alpina	62	
	15	Conjunto Primavera	48	
	16	Conjunto Gravatá	26	
	17	Conjunto Serrano	4	
		Conjunto Judeia	6	
	Privê Vila Borges	7		
北東部	18	Privê Mont Blanc Village	36	発展
	19	Privê Saint Moritz Village	15	
	20	Privê le Village de Fleurs	6	
	21	Privê Barauna	12	
	22	Privê Toca do Vale	6	
		Privê Aconchego da Serra	12	
	Privê Serra Bonita	25		
南西部	23	Privê Portal da Serra	20	分譲地もある
	24	Privê Camapuam	6	
	25	Privê Serrano	22	
	26	Privê Bevery Hill	9	
南部	27	Privê Gravatá	45	停滞
	28	Privê Bom Clima	—	
	29	Conjunto Bariloche	82	
	30	Conjunto Baviera	62	
	31	Privê le Village du Lac	24	
	32	Privê le Village du Mollin	25	
	33	Privê El Dolado	—	
	34	Privê Rio Ipojuca	72	
	Privê Jose Carlos Gunde	7	COHAB住宅の再分譲	
南東部	35	Privê Europa	12	発展
	36	Privê Porta Florada	12	
	37	Privê Serra Florada	12	
	38	Privê Bela Vista	6	
	39	Privê Grand Village	6	
	40	Privê Campo Alegre	9	
その他		Privê Mandacaru	11	
		Privê Cruzeiro da Serra	10	
		Privê Minuano	7	
		Privê Water Place Village	7	
合計			1,096	

番号は第3図に対応する。所在が確認された別荘団地のみに番号を付した。

（グラバタ郡役所の資料および現地調査により作成）。



バビエラ (Baviera), バリロッシェ (Bariloshe) およびヴィラージュドゥモラン (Village du Mollin) やヴィラージュドゥラック (Village du Lac) である。南東部の別荘団地の規模は20~30戸と北部よりは小さい。市街地を挟んで国道232号線の反対側に位置するため、交通の利便性では北部の別荘団地には劣る。南東部の別荘団地は、ファゼンダサンパイオの所有地を分譲したもので、近くには馬牧場もある。南東部の別荘団地のなかには、プリベ・グラバタ (Privê Gravata) やボンクリマ (Bom Clima) のように、分譲当初には市街地からはずれた場所であったが、グラバタ市街地の拡大にともなって市街地に包含されたものもある。このような別荘団地は週末に利用されるのみならず、常時居住している者もいると考えられる。また、市街地の南部に位置するプリベ・リオイポジュカ (Privê Rio Ipojuca) は、当初の目的では低所得者向け住宅として州の住宅供給公社 (COHAB, Companhia de Habitação) が造成した住宅地域であった。COHAB 住宅団地の入居者から不動産会社が土地を買収し、再造成して別荘団地として分譲したものである<sup>8)</sup>。

北部・南東部が開発年代の古い別荘団地の分布地域であるのに対して、北東部・北西部・南西部は比較的近年開発されたか、現在開発中の別荘団地が分布する。これらの地域に分布する別荘団地の規模は20戸程度のものももっとも多く、初期の別荘団地と比べると小規模である。レシフェに通じるかつての旧道沿いに立地するプリベ群は、両側に深い谷が刻まれた尾根筋にあることから、見晴らしがよい (写真2)。眺望のよさはプリベの分譲価格にも影響すると思われる。一方、市街地の北西部はファゼンダの分譲地であり、碁盤目状の道路区画がなされている。この地域は緩やかな斜面で、谷への眺望はよくないが、夜にはグラバタ市街地の夜景を堪能することができる。市街地南東部も緩斜面であるが、道路からの近接性があまりよくないためプリベの造成は比較的最近始まった。南西部はイポジュカ川の南で、北斜面を向いているので眺望は良好である。

プリベは一般に2階建ての個人住宅からなり、個別の駐車場も併設されている。プールのほか、時にはテニスコートなどの公共のスポーツ施設やバーベキューなどのできる施設が設置されているので、個人別荘に比べると植木や花の本数が少ない。しかし、最近のものには日本のコンドミニアムのように3軒長屋の集合施設からなるプリベや個人別荘のような豪壮な邸宅風なものからなるプリベもある。その一例が北西部の Privê Casa Blanca である。Privê Casa Blanca の1戸あたり床面積は約40m<sup>2</sup>で、1995年現在の価格はR\$ 22,000であった。一戸建てのプリベよりは手狭であるが割安である (写真3)。棟割り長屋形式の別荘の購入者は医師・軍人・裁判官など、シャカラヤ一戸建てのプリベを購入するには至らない所得水準にある人々である。プリベは棟割りでも、プール・集会場といった娯楽施設および門番は一戸建て別荘団地と同様に設置されている。

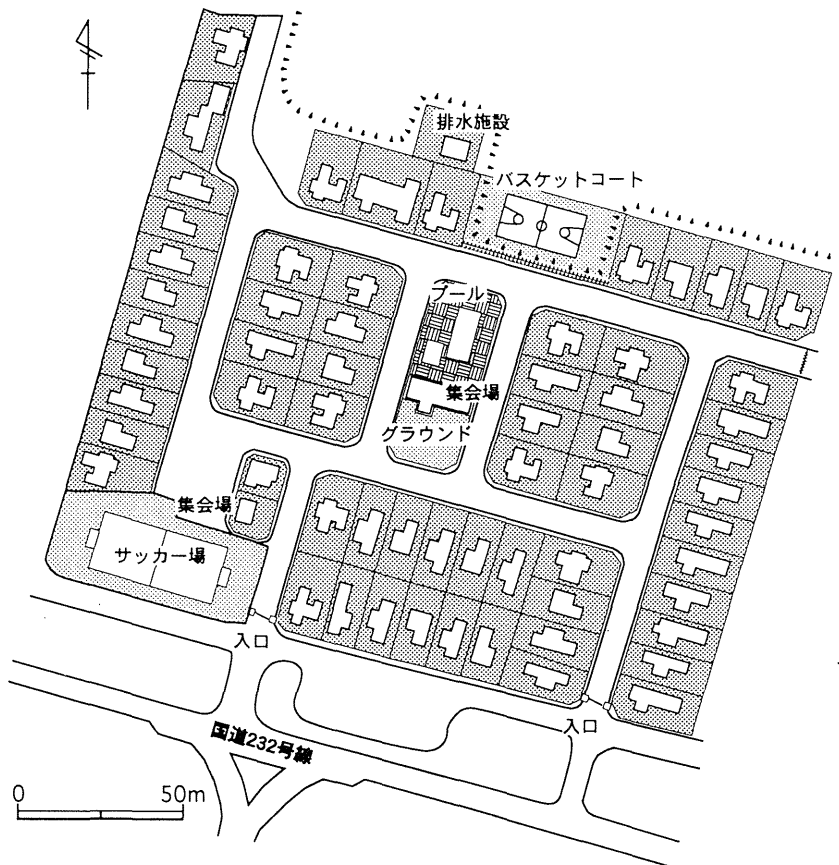
第2表でプリベの一覧をみると、別荘地の名前に興味をひかれる。初期にはスイス、アルプス、ベニスなどヨーロッパの観光地を示したり、ポルトガル語では山岳 (Serrano) を意味するものが多かったが、次第にモンブラン (Mont Blanc), ルツェルン (Luzern), サンモリッツ (Sant Moritz) などヨーロッパアルプスの著名な観光地名に因んだものが増加した。南アメリカの避暑地に因んだものもあるが (写真4), アメリカ合衆国に関連するプリベ名はビバリーヒル (Beverly hill) のみであった。このことはプリベの差別化の始まりを示すとともに、アメリカ合衆国への親しみよりヨー

ロッパに対する強い郷愁を持つブラジル人の心情を反映しているものといえる。

プリベの敷地面積は建設戸数によって異なるが、一般に1～5ha前後であろう。国道からのアクセシビリティがよいファゼンダのなかには、所有地の一面を造成して別荘地として販売する者もいる。したがって、道路区画の入った分譲地 (Loteament) は、グラバタの住宅地ばかりでなく別荘地予備軍といえることができる。また、土地台帳に不在地主で Granja Chamonix 14.1ha、確認面積2.0haと書かれているものもその名前からして将来的にはプリベとなるものといえよう。

## 2) プリベの施設配置と地元雇用

ここでは具体的にプリベの様相をみよう。第4図は国道232号線に北接する別荘団地アルピナ (Alpina) の施設配置を示したものである。ここは、1972年、セラーノ (現在の Hotel da Serra)、スイサ (Suíça) についてグラバタで3番目に造成された別荘団地である。ここには62戸の独立別荘家屋が道路により6つのブロックに分けられている。各家屋は一般の民家に類似し、豪壮な別荘という感じはない。各家屋の形はそれぞれ異なるが、急傾斜の屋根、マントルピース (Lareira) を備えたアルプス風の коттеージ建築であるという点では共通している。庭木や花も別荘の利用度や個人的な趣味を反映してさまざまである。しかし、建設後25年もたっていることもあり、全体としては調和の



第4図 別荘団地 Alpina の施設配置 (1997年)  
(COMPESA の資料および現地調査により作成)。

とれた落ち着いたのあるプリベといえる。

別荘団地アルピナの共用施設には、守衛のいる門を入れてすぐ左手にある小さなサッカー運動場、それに隣接して雨宿りできる集会施設がある。プリベのほぼ中央には、集会施設とプールおよび水道タンクがある。これらの中心共用施設に加え、北側にはバスケットコートと排水処理施設がある。この別荘団地の敷地は北に向かって緩やかに傾斜しているため、北側の列の家屋やバスケットコートは一段低く建設されており、そこからカピバリベ川の支流が作る急崖になっている。

ここの別荘所有者は、初期の別荘団地を反映して会社社長20人、医者15人、弁護士10人が主要なものであり、その他の職業はさまざまである。技術者や大学教授はそれぞれ1名にすぎない。62戸のうち、35戸の別荘は兄弟や友人間で共有されているため、概して別荘の利用頻度は高い。しかしなかには別荘を書庫として利用し、10年間に1度も訪れていない大学教授もいるという。

泥棒や強盗、あるいは不法占拠から集団で家屋を守ろうとする団地型の別荘が成立する1つの要因は、安全性の問題であろう。すなわち、個人別荘では門番に加え猛犬を放しているが、これだけでは不安は消えない。これに対し別荘団地アルピナでは管理人を7人も雇い、昼間に4人、夜間は3人で門番や団地内の巡回、共有施設の清掃を行う。さらに、別荘所有者は、滞在期間中に料理や掃除をする家政婦を雇う。アルピナ内の個人別荘の購入価格は、1997年現在約R\$35,000であり<sup>9)</sup>、毎月支払う共益費はR\$90であるという。

別荘の管理人や各所有者が雇用する家政婦はいずれも地元雇用である。60のプリベ、1,200戸にのほる別荘での雇用機会がグラバタの地域経済に果たす役割は大きい。また、新しいプリベが造成・分譲されると、購入者は家屋の家具・調度品をグラバタで調達する。グラバタは、ペルナンブコ州で最古と目されるグラバタ陶器 (Cerâmica de Gravata) や家具類の産地でもある。グラバタには300以上の木工場に加え、ブリキの玩具工場、衣料品工場なども存在する。とくに木工業はアマゾン川流域で伐採された熱帯性の硬木を使用し、堅牢で重厚な家具生産を主体としている。これら地場産業の工場のほとんどは家族経営による労働集約的な零細工場であるが、プリベ購入者による消費はこれらの工業にも大きな経済的波及効果を及ぼしている。

### Ⅲ-3 ホテルと観光客

#### 1) ホテルの立地と観光施設

グラバタのホテルは、その立地から市街地内にあるホテルと郊外型ホテルに区分できる。前者は鉄道駅や中心地および旧道沿いにある古いホテル5カ所、および国道232号線に立地する比較的新しいホテル4カ所である(第3図、第3表参照)。中心地(Centro)に立地するホテルは、部屋数15~38室までであり、いわば旅籠形式(Pausada)のようなものである。一方、新道沿いのホテルは、部屋数が21~70室までで、セントロのホテルに比べると少し規模が大きい。

一方、郊外型ホテルの部屋数は、56~508室までと規模が大きい。これらは一般にいうリゾートホテルで、ブラジルではオテル・ファゼンダと呼ばれる滞在型ホテルの一種である。元来、オテル・ファゼンダとは、農村部の豊かな自然環境の中に立地する大牧場に設立された宿泊施設のことで、都

第3表 グラバタにおける宿泊施設（1997年）

分類	記号	施設名	収容人員(人)			
			Apartamento	Chalé	Flat	合計
市街地型 ホテル	a	Hospedaria do Flavio*	5			5
	b	Hildebrando*	38			38
	c	Center*	16			16
	b	Santana*	15			15
	e	Vivenda São Jose	40			40
	f	Tropical*	24			24
	g	Bom Clima*	70			70
	h	Lar de Santana*	28			28
	i	Alps Motel	21			21
郊外型 ホテル	j	Centro Petur	104			104
	k	Serra	60			60
	l	Manibu	108	120		228
	m	Casa Grande	128	32		160
	n	Portal de Gravatá	396		112	508
	o	Colinas	56			56
		合計	1,109	152	112	1,373

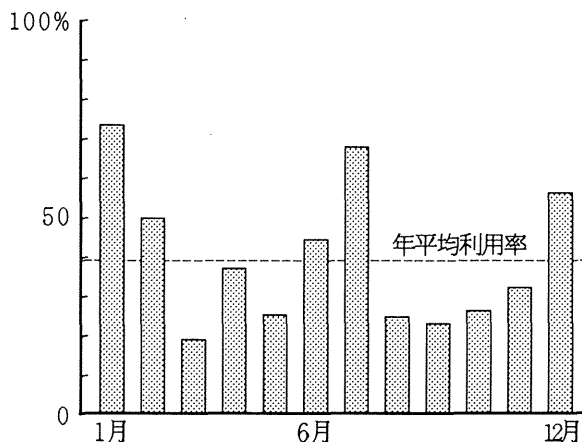
\*は Pausada（簡易宿泊所）を示す。  
アルファベットは第3図に対応する。

（グラバタ郡観光局の資料により作成）。

市型ホテルとは性格を大きく異にする。そこでは、ファゼンダで生産される新鮮な肉や野菜を賞味し、乗馬、農場内のアスーデ（貯水池）や川での釣り、そしてカーチングの自然散策などを楽しむことができる。グラバタにはこれに類似した郊外型ホテルが5カ所あることも、避暑地の特色を示すものであろう。これらホテルの部屋数は全体で1,500室近くになる。部屋の基本はツインかダブルであるので、収容能力は3,000人に達する。グラバタの代表的な郊外型ホテルでの聞き取りによると、集客圏はレシフェが70%、ナタールが15%、ジョアンペソアとマセイオがそれぞれ5%、その他が5%であるという。このことは、来訪者の多くが州都レシフェの都市住民や近隣諸州の州都に居住する中・上流階級であることを示唆している。

日本と同様、観光シーズンは、学校の休暇期間<sup>10)</sup>である夏休みや冬休みである。この時期、避暑客や観光客がグラバタに大量かつ長期的に流入する。第5図にグラバタの代表的な郊外型ホテルにおける1996年の月別客室利用率を示した。同ホテルの年平均利用率は39.85%にすぎず、決して効率的に経営されているとはいえない。入り込みのピークは1月と7月で、利用率はそれぞれ73.4%、67.8%である。この図からも、グラバタの観光シーズンが学校の夏休みや冬休みにあたる1・7・12月、およびサンジョアン祭が開催される6月にあることが理解できる。避暑型滞在者は別荘ばかりでなく、これらの滞在型ホテルや市街地ホテルを利用する。また、サンジョアン祭のように多数の観光客が訪れる時期には、別荘やホテルを使っても収容しきれない場合もあるという。1997年6月のそれには約6万人もの観光客がグラバタを訪れたという。市当局は、サンジョアン祭ばかりでなく、馬上槍試合（Cavahadas）やバケジャダ、ロデオ<sup>11)</sup>、イチゴ祭りなどを開催して観光客の誘致に努めている。

観光客を対象としてレストラン、土産物店といったサービス施設の整備・充実も進んでいる。前述



第5図 郊外型ホテルにおける月別客室利用率 (1996年)  
(Hotel Fazenda Portal do Gravatáの資料により作成)。

の陶器店、家具店に加え、ブリキ玩具・人形・藁細工・金属細工などの豊富な民芸品などの土産物店もある。また、国道232号沿線には、カルネ・デ・ソルなどの郷土料理からヨーロッパのフォンデュ (Fondue) 料理専門店まで、数多くのレストランが立地している。

さらに、国道沿いには農産物の直売店も数多くある。グラバータを代表する温帯作物のイチゴ (ブラジル南部で生産される大きなイチゴも売っている) をはじめ、グラビオーラやパイナップル、ピーニャ (釈迦頭) などが販売されている。季節に応じて、キャベツやトウモロコシ、花卉なども売られる。これらの農作物は、温帯的・プレジヨ的な作物で、海岸地帯から訪れる観光客には高原の冷涼感を与えるものである。

## 2) シャレーとフラット

郊外型ホテルのなかにはシャレー (Chalé) やフラット (Flat) を併設するホテルがある。シャレーやフラットは、ホテル内に建てられたマンション型の集合別荘のことである。シャレーおよびフラットを有するホテルは、オテル・ファゼンダ・ポルタル・デ・グラバタ (Hotel Fazenda Portal de Gravatá), オテル・マニブ (Hotel Manibu), およびオテル・カザ・グランデ (Hotel Casa Grande) の3カ所である。この別荘システムは、オテル・ファゼンダ・ポルタル・デ・グラバタのオーナーが、1994年にノルデステで最初に導入したものである。彼はホテル・ファゼンダ内の見晴らしのよい場所にマンション型の集合別荘を建築し、土地と別荘家屋 (部屋) をセットにして分譲した。別荘購入者は、水道や電気料などの共益費 (コンドミニオ, Condominio)<sup>12)</sup> をホテル側に支払うだけで、別荘家屋や庭の維持・管理、守衛、清掃、電話の利用など、さまざまなサービスをホテルの宿泊客と同様に受けることができる。

シャレーとフラットは基本的に同じシステムの集合別荘で、その違いは規模と豪華さにある。現在、ホテル・ファゼンダの敷地内には、合計9棟のシャレーが建築されている。2階建ての各棟には、階段を挟んで左右に合計4戸のシャレーが集合している (写真5)。地上階 (1階) のシャレーは面積が72.02m<sup>2</sup>で、スイートルーム2つに部屋1つ、そしてダイニングキッチンからなる。一方、

2階のシャレーは面積が107.41m<sup>2</sup>と大きく、3つのスイートルームに部屋2つ、クローゼット、そしてダイニングキッチンからなる。売却時（1994年）の販売価格は、地上階のシャレーがR\$ 55,000、2階のシャレーがR\$ 65,000であった。シャレーの売れゆきは極めて好調で、すでに建築が始まった建物も含めてさらに29棟を増築する計画である。

一方、フラットはシャレーよりも規模の小さなマンション型の集合別荘で、スイートルーム1つに部屋1つとダイニングキッチンからなる1タイプのみである。フラットは2階建ての建物が1棟あるのみで、そこに各階11戸ずつ合計22戸の個人別荘が内包されている。フラットは、1994年に1戸当たりR\$ 22,000で売り出されたが、現在その価格はR\$ 35,000まで高騰しているという。

また、シャレーやフラットの持ち主は、自らそれを利用しない時には第三者に自由に賃貸できることになっており、貸別荘として不動産の利用効率を高めることが可能である。この場合、契約では賃貸料の7割を別荘の所有者が受け取り、残りの3割はホテル側に支払う規則となっている。

#### IV 種馬牧場と温帯野菜生産

##### IV-1 種馬牧場と競走馬牧場

グラバタの成立は、前述のように牛道の宿駅と牛を飼育する大牧場ファゼンダの設立によるものであった。そのため、グラバタの地名にはファゼンダ名が圧倒的に多く、南部の山地とその南にブレジョ名やサトウキビ栽培を起源とするエンジェーニョ名があるのみである。

グラバタの土地台帳をみると、1,086名が25,459haの土地を所有し、1人あたりの平均規模は23.4haとなる。しかし、このなかには5ha前後の小規模な農地しか持たないミニフンデイオが848人であるのに対し、100ha以上の中規模農地の所有者はわずか64人で、彼らが全農地の約60%にあたる15,222haを占有している。しかも、この100ha以上のファゼンデイロのなかには不在地主が多い。

第4表は、土地台帳から不在地主の所有する100ha以上のファゼンダと種馬牧場、および確認できた牧場を示している。種馬牧場は一般にアラス（Haras）と呼ばれ、競走馬の育種場である。ファゼンダでは放牧牛を管理するため馬を飼育しているが、このアラスはそれとは異なる。アラスは入口の門から白く塗られた四角柱の牧柵が並び、瀟洒な邸宅への進入路も花や緑化木で飾られているので、景観的にも一般のファゼンダと区別できる。アラスの中には、バケジャーダや馬術障害コース、さらには馬上槍試合や輪投げ試合の施設を備えたものまで存在する。第4表のなかにはアラスと確認できた100ha以下の牧場やグラバタの所有者も入れてある。現在グラバタのアラスは100以上にも達するといわれるが、そのうち確認できたものは1割しかない。

ここで郡別統計によりグラバタ郡の馬の飼育頭数をみると、1975年、1980年にはそれぞれ1,182頭、1,081頭であったものが、1985年以降は1,900頭前後で推移している。1994年の1,898頭は、ヴィトリアデサンアントン郡の3,300頭に次ぐ。ペルナンブコ州のブレジョス地帯は馬飼養頭数が比較的多いことで知られるが、グラバタはこれらブレジョス諸郡と比べても頭数が多い<sup>13)</sup>。本地域で飼育される馬の品種は、マンガラルガ（Mangalarga）とクアルト・デ・ミーリャ（Quarto de milha）が主体であるが、加えてカンポリナ（Campolina）、アラビス（Árabes）、アングロ・アラビ（Anglo Árabe）、

第4表 主要な不在地主のファゼンダ (100ha 以上) とアラス

番号	名称	面積 (ha)	所有者の所在地	馬頭数	備考
1	Faz. C. C. Jardim	929.2	Recife		
2	Faz. Serra Grande	641.2	Recife		
3	Faz. N. S. P. Socorro	370.0	Recife		
4	Faz. N. S. Fatima	350.0	Recife		
5	Faz. N. S. Conceição	327.0	Recife		
6	Faz. Sao Perdo	320.0	Recife		
7	Faz. Canáa	316.0	Recife		Canáa Agropastial Ltd.
8	Faz. Tejupio	300.0	Recife		
9	Faz. N. S. Lourdis	284.1	Recife	43	
10	Faz. Coelhos	254.1	Recife		
11	Faz. Vele do Carua	249.0	Maceio		
12	Faz. Santa Maria	232.0	Olinda		
13	Faz. Paraíso	215.0	Recife		Privêの分譲
14	Faz. Passira	207.0	Recife	87	
15	Faz. Serra Grande	205.0	Recife		
16	Faz. Santa Marta	202.5	Recife		
17	Faz. Pajau	200.0	Recife		
18	Faz. Depigua	190.0	Recife		
19	Faz. Vale da Esperança	172.2	Recife		Friguel Ltd.
20	Faz. Sitio Juca	160.0	Recife		
21	Haras Condic	156.0	Recife	18	Condic Agropecuario
22	Faz. Varzea Grande	138.8	Recife		
23	Faz. São Jose	136.5	Gravatá	14	
24	Haras do Vale (Pequeira)	131.0	Recife	98	
25	Faz. Redenção	124.0	Recife		
26	Faz. Colina Verde	112.3	Recife		
27	Faz. Cristo Rei	105.2	Paulista		
28	Faz. Panorama	103.3	Recife		
29	Faz. Nordeste Haras	78.1	Olinda		
30	Recanto do Báoba	71.7	Recife	3	
31	Faz. Sampo	60.0	Recife		
32	Faz. Haras da Serra	42.6	Recife	37	分譲地も販売
33	Faz. Maracana	4.8	Gravata		

番号は第6図に対応する。

(INCRA (1997): Diretoria de Cadastro Rural: Gravatá, Criadores e Proprietarios em Orden Alfabética, 1991, および現地調査により作成).

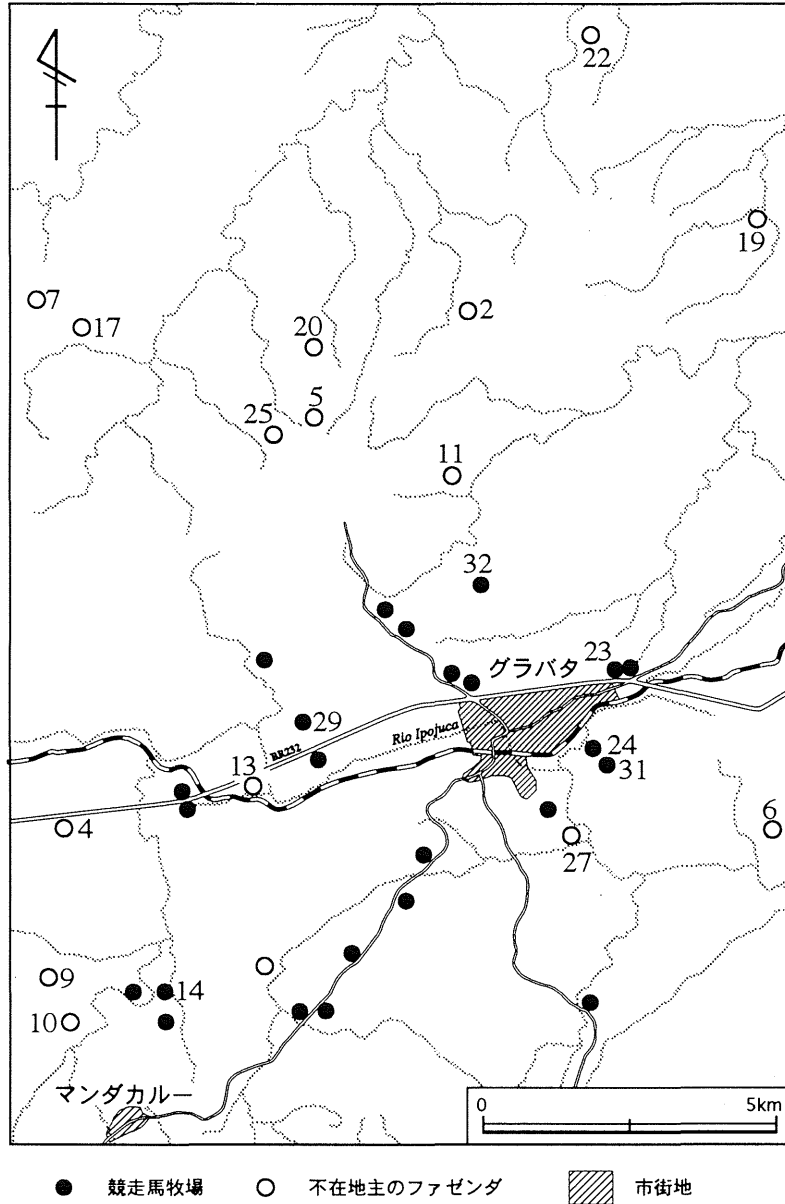
プーロ・サンギ・イングレース (Puro Sângue Inglês, P.S.I.), アンダルーズ (Andaluz) などがあり、きわめて多様である。

ヨーロッパ系の大都市には競馬場があるのが常であるが、それは熱帯でも例外ではない。馬の速さと強健さ、優美さを競う競馬は、騎士道を踏襲するものとして貴族や上流階級に歓迎された。現在でも競走馬の所有は経済力と名声を示すことであり、おもに都市富裕階級が馬主となる。馬の育成・休養牧場として、レシフェからの交通路に恵まれた高燥なアグレストエやブレジョが注目された。前述のようにグラバタに土地を持つファゼンデイロのなかには、農場の一部を種馬牧場や競走馬牧場に転用するものも現れた。その結果、グラバタでは1980年代から馬牧場が増加した。

第6図は不在地主のファゼンダと確認されたアラスを示したものである。不在地主のファゼンダはほぼファゼンダ名と一致するが、どちらかといえば、グラバタやグラバタからのアクセスがよい地点

に多い。なかでも、グラバタからマンダカルーへいたる道の途中に位置するアラス・パシラ (Haras Passira) は、その西のファゼンダ・エストレーラ (Fazenda Estrela) とともに、手入れの行き届いた広大な放牧地、厩舎、コラール、試走コースなどを備えた美しい種馬牧場であった。これらのアラスには、マンガラルガ種の競走馬が飼育されていた。

グラバタの北方の尾根にあたるセーラ・ド・マロト (Serra do Maroto) に位置する42.6haのファ



第6図 グラバタ郡における競走馬牧場の分布 (1997年)

数字は第4表に対応する。

(グラバタ郡役所の資料および現地調査により作成)。



ゼンダ・アラス・ダ・セーハ (Fazenda Haras da Serra) は、マンガラルガ種の競走馬を42頭飼育する、8年前に設立された牧場である。門を入ると事務所、厩舎に加え、コラル、試走コースがあった(写真6)。24頭を飼育できる尾根筋の厩舎には、16頭の牝馬と競走馬、2頭の種牡馬が飼育されていた。この牧場はサルバドール、ベロオリゾンテ、レシフェの競馬での入賞馬を生産したこともある。さらに、この牧場では所有地を区画して、プリベ・セーラ・ド・マロト (Privê Serra do Maroto) を分譲中であつた。レシフェ在住の所有者F氏は、レシフェ南部の海浜保養地であるポンタ・デ・ガリーニャス (Ponta de Garinhas) にも牧牛ファゼンダを所有し、農場主であると同時に土地投機に敏感な不動産業者的色彩が濃厚である。

なお、競走馬の所有者は、別荘所有者が会社社長、弁護士、医者からなるのと同様に、レシフェの上流社会を構成する企業家たちである。彼らは避暑地グラバタの上流社会を構成するメンバーでもある。さらに、近年では馬だけでなく優良犬の育種も活発に行われており、約80人のブリーダーがグラバタに存在するという。

#### Ⅳ-2 温帯野菜・花卉栽培

一般に熱帯では温帯野菜や落葉果樹の生産は高原や山地斜面に限定されるため、比較的高価格で取引されることが多い(斎藤・陳, 1984; 斎藤, 1990b)。ここではグラバタの環境を活用した温帯野菜や果樹の栽培状況をみよう。グラバタ郡の主要農作物の収穫面積の推移をみると(第5表)、グラバタがアグレステに位置する環境を反映して農作物はトウモロコシとフェジョン豆が最も多い(Saito

第5表 グラバタ郡における農作物の収穫面積の推移(1975~1997年)

Crops	1975	1978	1980	1982	1984	1985	1988	1990	1992	1994	1997
綿花Algodão	588	900	1,000	800	350	150	98	55	20	60	x
フェジョン豆Feijão	1,351	105	200	360	700	200	485	425	770	870	x
トウモロコシMilho	2,305	2,200	2,000	2,000	1,100	600	1,600	1,700	1,100	1,250	x
サトウキビCana de Açúcar	239	500	800	1,000	1,200	800	700	600	600	800	x
マニオクMandioca	1,893	800	870	900	900	900	300	200	300	160	x
バナナBanana	134	34	40	80	300	320	400	500	550	600	x
コーヒーCafe	731	288	264	160	200	80	50	30	40	35	x
オレンジLaranja	32	24	30	40	60	50	10	10	10	8	x
ミカンTangerina	4*	2	8	15	30	35	15	17	18	18	10
パイナップルAbacaxi	289*	100	50	120	250	160	500	400	450	350	x
グアバGoiaba	31*	x	x	x	x	x	x	x	x	x	10
マラクジャMaracuja	x	x	x	x	x	2	x	x	x	x	20
グラビオーラGraviola	x	x	x	x	x	0	x	x	x	x	20
アセロラAcerola	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	20
トマトTomate	38	50	50	35	35	10	10	5	5	6	5
ニンジンCenoura	656**	x	x	x	x	1,555**	x	x	x	x	30
香菜Coentro	11**	x	x	x	x	55**	x	x	x	x	10
ピーマンPimentão	122**	x	x	x	x	1,168**	x	x	x	x	15
キャベツRepolho	95**	x	x	x	x	872**	x	x	x	x	15
イチゴMorango	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	10

\*1,000果実 (frutas), \*\*トン (t), その他は ha.

(Censo Agropecuario: Pernambuco, 1975, 1980, 1985, Produção Agrícola Municipal, 1978-1994, Sindicato の資料, および IBGE の資料により作成).

et al., 1986; 斎藤・矢ヶ崎, 1989). ノルデステ, とくにセルトンでは数年に1回の割合で旱魃に襲われる (Saito and Yagasaki, 1995; 斎藤ほか, 1997). アグresteでは旱魃の被害はセルトンほど深刻ではないが, その影響は強い. トウモロコシやフェジョン豆の収穫面積に大きな年変動があるのはそのためである. また, 草本性の綿花が大幅に減少しているのは, ビクードによる被害のみならず, サンフランシスコ川中流域の綿花栽培地域との競合に敗れたためであろう (斎藤ほか, 1991; 斎藤・矢ヶ崎, 1991).

しかし, グラバタがアグresteの一般的地域と異なる点は, プレジヨスを活用した温帯作物や果物の栽培にある. 温帯作物として高原避暑地を代表するものは, イチゴである (斎藤, 1990). ブラジルのイチゴ栽培地域は, 南部のリオグランデドスール州一帯が中心であるが, グラバタもまた局地的な産地である. イチゴはグラバタ郡南部のプレジーニャやプレジーニョなどの丘陵地域で約10年前から小規模に栽培されている. ブラジル南部の大粒のイチゴと異なり, 小粒で食味のよいカンピナスやラサン (Lassan) が栽培されてきた. しかし, これらの品種は日持ちが悪く輸送に適さないため, 今年からは大粒のドーバー (Dover) を栽培し始めたという. グラバタの農村労働者組合 (Sindicato Trabalhadores Rural de Gravata) の資料では, イチゴの栽培面積は10haに過ぎないが, 現地の技術指導員の話では現在120人の小規模栽培者がおり, 1996年現在の総栽培面積は22aに達するという. また, 1997年からは技術者の指導のもとに6人が専門的にイチゴ栽培に取り組み始めた. さらに来年からはノルデステ銀行とブラジル銀行の融資が受けられるようになり, 生産者数・生産量ともにさらに増加することが予測される. イチゴ栽培は海岸部の都市住民に冷涼感を与える効果もあり, グラバタ市街地の国道には直売店がならび, 都市部からの観光客を相手に南部産のイチゴとともにグラバタ産のイチゴを販売している (写真7).

イチゴとともに高原らしさを形作る農作物はキャベツとニンジンである (矢ヶ崎ほか, 1989). グラバタ郡におけるそれらの栽培面積は, 統計上それぞれ15haと10haに過ぎない. しかし, グラバタから南西のマングカルーへ向かう道路の両側に広がる小盆地は, 日本の孀恋村や八ヶ岳山麓の野辺山高原を連想させる典型的なプレジヨス地帯で, 両作物の実際の栽培面積は統計数値より多いのではないかと思われた. なお, 経年的に統計の得られるトマトの収穫面積が減少しているのは (第5表), 忌地性 (斎藤・矢ヶ崎, 1989) とサンフランシスコ川流域との競合に敗れたためであろう.

グラバタで最近急激に増加しているものに花卉栽培がある. 花卉栽培はサンパウロ同様, 日系人の影響で始まった (矢ヶ崎ほか, 1992). ペルナンブコ州ではグラバタの南のリオボニートに入植した日系人が拡散して菊栽培を広めた. しかし, グラバタでブラジル人が栽培している花は, バラ, グラジオラス, キクに似たカーリーニョ (Carinho) およびカスミ草に似たセレ (Cele) である. これらの花卉は, アスーデの周囲のバザンテ農業として, またプレジヨス地帯の作物としてキャベツやニンジンと同様に小規模栽培者によって栽培されている (写真8). なお, これらの花卉は切り花としてトラックでレシフェ市場に出荷される. 一方グラバタ郡におけるキクとバラは, 現在4戸 (うち2戸は日系人) の大規模生産者によって栽培され, 両者の栽培面積はそれぞれ1.5haと8haである.

温帯作物と同様, 熱帯の山地で栽培されるものに果実類にバナナ, コーヒーがある. 特にコーヒー

はカルアルーの北のタクアリチンガドノルテ郡が有名のように熱帯の山地作物といえる。サトウキビは量的には多いが、雨の多いプレジヨス地帯の代表的作物であり、パイナップルはゾナダマタとアグレステの境界部に卓越する作物といえる。その他、収穫面積では少ないが、グラビオーラ、マラクジャ、アセロラ、グアバ、ミカンなど、多種類の果樹栽培も本地域に特徴的である（第5表）。

## V むすび

グラバタは標高約500mに位置しているにもかかわらず、ノルデステ第3の都市レシフェより、月平均気温が4～5℃も低く冷涼な高原の気候を有している。しかも、ボルボレマ高地のプレジヨス的性格を備えつつも降水量がガラニユンスほど多くはなく、アグレステ的な高燥地でもある。この冷涼・高燥という高原環境が、レシフェから自動車で1.5～2時間という近接性と相まって、グラバタを週末避暑地として成長させた。

避暑地は、個人別荘（Chácara）から別荘団地（Privê）、リゾートホテル内のマンション型別荘（Chalê, Flat）まで時代とともに進展したが、とりわけグラバタを特徴づけるのは別荘団地である。それらは10～60戸の個人別荘とプール、テニスコート、集会場などの共用施設からなるコンドミニウムであり、別荘管理の効率化や安全性の確保を最優先とした結果生み出された、ブラジルの閉ざされた別荘形態といえよう。

別荘の所有者は、上流階級を構成するレシフェ在住の会社社長、弁護士、医師などである。上流階級が馬主となっている競走馬の牧場が数多く存在するのもグラバタの特色である。種馬牧場のアラスは牧牛ファゼンダと比べて手入れが行き届き、牧歌的なパークランド牧場景観は都市住民が好む観光資源ともなっている。

一方、グラバタの高原的性格はプレジヨス性格と相まって、温帯野菜や果物・花卉類の栽培地域を形成している。週末ごとに訪れる約2万人の別荘客や観光客に、キャベツ、ニンジン、ベテハバ、ピーマンなどの新鮮な野菜やグラバタを代表するイチゴが提供される。ジュースにすると美味しいグラビオーラや、オレンジ、グアバなどの果実も生産されている。これらは、バラ、グラジオラス、セリ、カーニョなどの花卉とともにグラバタ市内の青果物店や国道232号沿線の直売店で販売されている。

別荘団地の造成により、別荘家屋では家具や調度品が必要となるが、グラバタは古くから陶器や家具・木製品の産地でもあり、これらの需要を地元で充足することができる。また、国道232号沿線に立地するホテルやレストランも別荘客や観光客を対象とするものが多い。結果として、グラバタの別荘化は別荘管理人や家政婦などの直接的な雇用効果のみならず、建設業、家具製造業、サービス・飲食業をはじめ、グラバタ郡内のさまざまな業種に大きな波及効果をもたらし、市の経済を活性化させている。グラバタ郡の中心地区であるグラバタの人口増加率が、ベルナンブコ州の平均を上回って上昇している背景には、別荘地の造成にともなう人口の流入によるところが大きい。

最後にグラバタの地域構造についてみよう。牛道の宿場町として成立したグラバタは、鉄道駅の近くに郡役所やマーケットが立地する中心地がある。ホテルも町の発展段階を反映して、旧市街の中心

地に立地する市街地ホテルと国道沿いのホテル、さらには郊外のリゾートホテルに分類でき、それらが市街地から周辺部へと外延的に配置されている。別荘はグラバタの郊外に立地するが、なかでも別荘団地は国道へのアクセスが比較的よい市街地周辺に分布している。さらに別荘地帯の外側には、種馬牧場と牧羊ファゼンダが併存する。グラバタの市街地から離れた、市街地へのアクセスの悪い北部には伝統的なファゼンダが分布し、南部のプレジォス地帯には野菜・果樹・花卉の生産地帯が認められる。グラバタはアグレステの牧畜やトウモロコシ・フェジョン豆生産など町を取り巻く経済活動に支えられて発展してきたが、現在では別荘団地、競走馬牧場、プレジォスでの野菜・果樹・花卉生産に支えられているといえよう。

調査に際して平成7・8・9年度文部省国際学術研究「ブラジル北東部における農牧的土地利用の強度と地生態系の地域的変化」(代表齋藤 功:課題番号07041045)の費用を充当した。現地調査に当たってはムニシピオの観光局をはじめ、農業指導員、ホテル経営者等にお世話になった。記して感謝したい。

## 注

- 1) ボルボレマ高地は、ほぼ北東から南西方向に列状に複数の峰々(稜線)を持ち、その間に分水界を形成してカピバリベ(Capibaribe)川、イポジュカ(Ipojuca)川、ウナ(Una)川などの源流域となっている。最高峰は標高約1,100mである。
- 2) ガラニユンスはレシフェから南西209km、標高842mに位置する。ここにはホテルや別荘ばかりでなくコンベンションホールもあり、学術会議などもしばしば開催される。
- 3) 山地で地形性降雨のあるところを一般にプレジォスと呼ぶ。グラバタの南部にはBrejo de Fora, Brejo Velha, Brejinha, Brejo da Vila, Brejo Grandeなどの地名が数多く、プレジォス地帯であることを示している。ここには湧泉(Olho d'Água)が多数あり、天然水の泉(Fonte de Água Minerals)も存在する。
- 4) イポジュカルートとは、レシフェをたち、陸路ヴィトリアでイポジュカ川に到達し、イポジュカ川に沿って源流部まで進み、そこからふたたび陸路でモント(Moxoto)川に辿り着くまで歩く。そこからはモント川に沿って下り、ポアヴィスタでサンフランシスコ川に到達するというものであった(FIAM, 1982)。
- 5) FIAM(1982)によれば、グラバターレシフェ間の1980年の路線バス利用客数は、14,509回の運行で58万383人に達したという。
- 6) FIAM(1982)によると、1980年現在グラバタ郡には16,099の建築物があり、このうち約10,838戸が都市部、5,261戸が農村部に立地していた。全建築物のうち15,074戸は住居であり、このうち11,630戸(都市部に7,909戸、農村部に3,721戸)には定住者がおり、1,159戸は時々利用される建物である。また2,270戸は空き家、15戸は修道院や保護施設などの集合住居である。
- 7) プリベは高原保養地ばかりでなく、例えば著名な海浜リゾートであるレシフェ南部のポルト・デ・ガリーニャス(Porto de Garinhas)のような場所にも存在する。
- 8) これまでに州政府機関であるコアビ(COHAB, Companhia de Habitação)や連邦銀行であるCaixa Economica Federalは、低所得者に持ち家を提供する低利融資事業を実施してきた。現在、プリベ・リオ・イポジュカとなっている別荘家屋も、かつてはCOHABにより低所得者用に建築された住宅団地であった。現在R\$15,000で販売されている家屋は、毎月R\$34.64で25年間の返済期間であったが、別荘地化の波のなかで高所得者層に再開発して売却しようとしている。つまり当初の事業目的とはまったく異なる別荘地帯が生み出されている。
- 9) ブラジルの通貨は長い間クルゼイロ(Curuzeiro)であったが、インフレの進行で貨幣価値が下がり、1988年のクルザード(Crusado)を経て1994年からレアル(Real)に切り替えられた。このレアルプランにより、以前に比べて物価は安定している。1996

- ～1997年には、1リアル(R\$)はほぼ1米ドル(\$)と等価であった。
- 10) 一般に、ブラジル北東部の夏休みは12月20日頃から翌年の2月10日頃まで、冬休みは6月26日頃から7月23日頃(ただし、私立学校は8月初旬)までである。
- 11) バケジャーダやロデオは、投げ縄や牛の尾を掴んで捕まえ倒したり、荒馬(牛)から振り落とされないように馬(牛)を馴らしたりする競技のことである。
- 12) ホテル側に支払う共益費は、物価とともに変動する最低賃金を基準として、部屋の大きさごとに決められている。1カ月当たりの共益費は、最も小さなフラットが1最低賃金、地上階のシャレーが1.5最低賃金、最も大きな2階部のシャレーが2最低賃金である。ちなみに、調査当時の最低賃金は120レアイス(約1万円)であった。
- 13) プレジヨス地域における主な郡の馬飼養頭数は、アグレスチーナ(Agrestina) 1,750頭、カルアルー1,520頭、アルチーニョ(Altinho) 1,450頭、ポニート(Bonito) 1,356頭である。

### 参考文献

- Aiken, R. (1987): Early Penang hill station. *Geographical Review*, **77**, 421-439.
- Almeida, H. de (1958): *Brejos de Areia*. Rio de Janeiro, 301p.
- Andrade, M. C. de (1968): *A Terra e o Homen no Nordeste*. 4ª edição (1980), Sao Paulo, 278p.
- Andrade, M. C. de (1979): *O processo de ocupação do espaço regional do Nordeste*. SUDENE, 142p.
- Deffontaines, P. (1937): Mountain settlement in the Central Brazilian Plateau. *Geographical Review*, **27**, 394-413.
- FIAM, Secretaria de Planejamento, Governo de Pernambuco (1982): *Gravatá*. FIAM, 65p.
- Ferrez, G. (1970): *Colonização de Teresopolis*. Rio de Janeiro, 146p.
- Lins, Alberto, F. (1965): *Gravatá*. Arquivo Público Estadual, 270p.
- Lins, Rachel, C. (1989): *Area de ocupação do agreste de Pernambuco*. SUDENE, 327p.
- Melo, Mario Lacerda de (1980): *Os Agreste*. SUDENE, 553p.
- Mitchel, N. (1972): *The Indian hill station : Kodaikanal*. University of Chicago, Department of Geography, Research Paper, **141**, 199p.
- Price, A. (1934): White settlement in Saba island, Dutch West Indies. *Geographical Review*, **24**, 42-60.
- Saito, I., Yagasaki, N., Pazela, E. and Mullar, K. (1986): Agriculture and land tennure in the Salgado de São Felix along the middle reaches of the Paraíba River in Northeast Brazil. *Latin American Studies*, **8**, 91-124.
- Saito, I. and Yagasaki, N. (1987): Zonal patterns of agricultural land use in the state of Paraíba, Northeast Brazil. *Geographical Review of Japan*, **60(B)**, 66-82.
- Saito, I. and Maruyama, H. (1987): Vertical change of land use patterns in the sertão of Paraíba and Pernambuco states, Northeast Brazil. *Annual Reports, Institute of Geoscience, University of Tsukuba*, **13**, 13-18.
- Saito, I. and Yagasaki, N. (1995): Drought, irrigation and changes in the sertão of Northeast Brazil. *The Fragile Tropics of Latin America*, The United Nations University, 301-323.
- Troll, C. (1968): The cordilleras of the tropical Americas: aspects of climatic, phytogeographical and agrarian ecology. *Colloquium Geographicum*, **9**, 155-556.
- Waibel, L. (1928): Die Sierra Madre de Chiapas. Edwin Fels ed.: *Verhand und wissensch. Abhandlungen des Dt. Geographentages zu Karlsruhe*, Breslau, 87-98.
- Webb, K. E. (1974): *The changing face of Northeast Brazil*. Columbia University Press, 205p.
- 齋藤 功(1990a): 熱帯の避暑集落と温帯野菜栽培. 『環境と生態』(齋藤・野上・三上編)古今書院, 215-233.
- 齋藤 功(1990b): 北スマトラ, カロ高原における観光化と温帯野菜栽培の発展. 人文地理学研究, **14**, 1-23.
- 齋藤 功(1997): ラテンアメリカの地域研究法. 『地域研究法』(藤原健三編)朝倉書店, 131-156.
- 齋藤 功・陳 憲明(1984): 台湾中央山地における温帯落葉果樹・高冷地蔬菜栽培の発展. 人文地理学

- 研究, 8, 41-180.
- 齋藤 功・矢ヶ崎典隆(1989): ブラジル北東部パラíba川中流域ボケロンの灌漑農業. 人文地理学研究, 13, 23-52.
- 齋藤 功・矢ヶ崎典隆・丸山浩明(1991): ブラジル北東部サンフランシスコ川中流域における灌漑農業の発展と企業的農場. 人文地理学研究, 15, 269-300.
- 齋藤 功・矢ヶ崎典隆(1991): ブラジル北東部サンフランシスコ川中流域における農産加工業の進出と農業構造の変化. 経済地理学年報, 37, 225-244.
- 齋藤 功・矢ヶ崎典隆・須山 聡(1997): ブラジル北東部セアラ州リマカンポスの中規模灌漑農業. 人文地理学研究, 21, 69-91.
- 矢ヶ崎典隆・齋藤 功・キース・マーラー(1989): ブラジル北東部テシェイラ台地の灌漑農業. 横浜国立大学人文紀要, 第I類, 35, 71-98.
- 矢ヶ崎典隆・齋藤 功・丸山浩明(1992): ブラジル北東部サンフランシスコ川中流域における日系人農業の発展とその影響. 横浜国立大学人文紀要, 第II類, 38, 77-106.

## Gravatá, One of the Hill Resorts in Northeast Brazil

Isao SAITO, Solange COUTINHO\*, Hiroaki MARUYAMA\*\*

and Satoshi SUYAMA

Geographical studies on the hill stations and summer resorts in Latin America are scarce except Petropolis and Teresopolis by Deffonetaines. However, there are many local hill stations and summer resorts in Latin America. In this study, the authors clarify the characteristics of summer resorts in Tropical Latin America by taking a case study as Gravatá, one of the local summer resorts in Northeast Brazil.

Gravatá locates about 80 kilometers west of Recife, with altitude of 500 meters on the Borborema plateau in northeast Brazil. Thanks to its location, Gravatá has enjoyed cool climate like Petropolis and Teresopolis, hill stations on the Serra do Mar near Rio de Janeiro. Gravatá had its origin in corral post of cattle trail from sertão to Recife. It grew up from povoado (village) to vila (town) in 1981, to cidade (city) in 1884, to município (county) in 1893. The population of Gravatá county increased from 8,021 in 1872 to 61,494 in 1991. Railroad and road construction accelerated the development of the city.

One of the most outstanding landscapes of Gravatá is newly constructed cottages around built-up area of the city. Hill cottages, or second houses in Gravatá are classified into three types; private cottages (chácara), condominium (privê or compound), and chalê and flats. Chácara is a private cottage with swimming pool. Many flowers and fruit trees are planted with 1-2 hectares lot, which is surrounded by fences. It looks like traditional large house (Casa Grande) on the fazenda (ranch). Privê or condominium is the collective cottages, and characterizes Gravatá as one of the summer resorts (Figure 3). Moreover, each privê is consisted of 10 to 60 cottages and several common facilities such as swimming pool, tennis and basket ball court and meeting hall (Table 2). Privê is enclosed with fences like compounds in Indian hill stations. Generally, privê employs 2-7 guards to keep secure. Each owner of cottages in the privê also employs a female housekeeper with personal contract. Chalê and flat

is a room of house attached to resort hotel. Owners of the rooms are urban dwellers in coastal area. When they do not use the room, the hotel lets it to other tourists. The owner receives around 60 percent of the return.

Most of the cottage owners live in Recife and coastal cities, and are consisted of mainly company owners, lawyers and doctors. They come to their cottages in Friday evening or Saturday morning and return to Recife in Sunday night except summer holiday and vacations. Thus, Gravatá is called as one of the typical weekend resorts in Northeast Brazil. Construction of hill cottages, mainly *privês*, demands for traditional local furniture, sculpture and other handicrafts. Weekenders consume meat, fruits and vegetables, and enjoy meals at various restaurants in Gravatá. Moreover, owners of the cottages need abundant local employments as guards and housekeepers. As a result, increase of hill cottages vitalizes the various economic activities in Gravatá. High rate of population growth in Gravatá city is responsible for the development of the cottages.

On the other hand, cool climate enables them to cultivate the temperate vegetables such as cabbages, carrots and lettuce, and flowers such as rose, *colinho*, *celi*, and *chrysanthemum* in *brejos* with orogenic precipitation. Above all, strawberry is the representative temperate crop and famous for its taste in Gravatá. *Graviola* (*Cherymoya*), *goiaba* (guavas) and orange are also produced in *brejos*. These fruits and vegetables are vended for weekenders and other visitors at temporary shops along the highway street, BR232.

There are many cattle fazendas in Gravatá. More than half of the fazendas are owned by absentee landlords, who mostly live in Recife. Some of the fazendas has long tradition to raise the horses. Fazendas, which specialize horse breeding, especially race horses, are called *harases* (stables). *Harases* locate on outer zone of hill cottage area. Owners of the *harases* are the wealthy residents in Recife as well as cottage owners. As pastoral landscape of the *harases* keep better than cattle ranches, they provide good resources for visitors.

Viewed from the spatial standpoint of land use, Gravatá has zonal patterns. The inner, central Gravatá is old built-up areas, and has station, city hall, wholesale market and inns. Relatively new residences add this central area and forms outer built-up area of the city. Some resort hotels and bus terminal along highway constitute this districts. These two built-up areas are surrounded by private cottages and *privês* in suburban area of Gravatá. *Harases*, or specializing horse breeding are distributed in outer suburban zone. Cattle fazendas locate in northern part, while temperate vegetables and flowers area locate in southern part of this zone, *brejos*. As a conclusion, Gravatá county is classified into 5 zones and 6 areas except most southern part.

Key words: hill station, weekend resort, *Privê*, *haras*, *brejos*



**写真1** 尾根の高まりにある別荘  
インドや東南アジアの高原保養地を想起させる尾根筋の丘にある個人別荘。周囲の栽培作物はトウモロコシとパイナップルである。(1997年7月30日)



**写真2** 尾根筋に建設された別荘団地  
レシーフェとグラバタを結ぶ旧道の脇に建つ別荘団地モンブラン (Privé Mont Blanc)。独立家屋からなり、ここからの眺望は素晴らしい。(1997年8月1日)

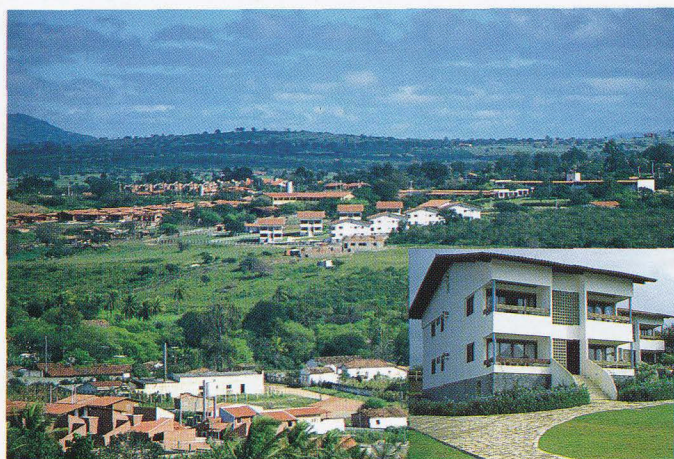




**写真3** 別荘団地バリロッシュのパラボ  
ラアンテナを備えた家屋  
初期の別荘団地。82戸からなる  
規模の大きな別荘団地とい  
える。(1997年7月30日)



**写真4** 別荘団地カーザブランカ  
三軒長屋4棟、12戸からなる  
別荘団地。この小さなプリベ  
にもカットのように共同の  
プールやシュラスコを楽しむ  
集会所がある。(1997年7月28  
日)



**写真5** リゾートホテルの遠景とシャ  
レ(カット)  
イボジュカ川と国道の間にあ  
るリゾートホテルHotel Portal  
de Gravatá。ここはノルデス  
テではじめてシャレーやフラ  
ットを経営した。周辺には  
別荘団地が散在する。(1997年  
7月29日)



写真6 種馬牧場と競走馬マンガラーナ

グラバタの北の尾根 Serra do Maroto にある競走馬牧場 Fazenda Haras da Serra. 8年前に設立された牧場で、競走馬 Mangalana の生産と調教にあたり、入賞馬を出している。この牧場は所有地の一部を別荘団地として分譲している。(1997年7月30日)

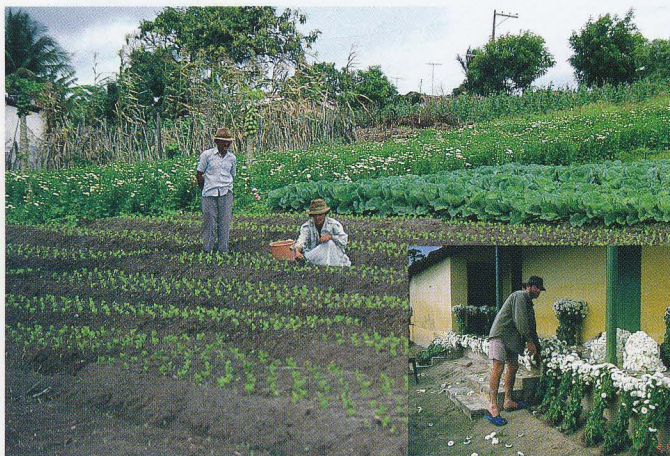


写真7 プレジヨスにおける野菜・花卉の栽培

グラバタの南西部マンダカール付近のプレジヨス地帯。キャベツと菊に似た花カリニーヨが栽培されている。カットはカリニーヨの花。(1997年8月1日)



写真8 農産物の直売と名産のイチゴ

国道では温帯作物やグラビオラ、ピーニャ、イチゴが販売されている。イチゴはブラジル南部のリオグランデスル州で栽培されているものより小さい。カットは特産のイチゴ畑。(1997年7月28日)